

目次

- ・ オピニオン...「共通教育改革は3段ロケットで」(1)
- ・ センターニュース...「E-Learningで授業改革を」他(3)
- ・ 授業のティップス...「聴覚障害学生への対応は」(4)
- ・ センター運営委員会の動き...(6)
- ・ センター日誌...(7)
- ・ 授業に役立つ工具箱...「教養とは何か？」(7)
- ・ 学生の声...「専門知識を活かす授業望む」(8)
- ・ センター掲示板...「FD/SDメーリングリスト」(8)

オピニオン

共通教育改革は

3段ロケット方式で

大学教育総合センター 副センター長
共通教育企画・実施部長 松久 勝利

ルネッサンスプランのもと、改革された共通教育カリキュラムが3年目を迎えました。現段階で、どのような成果があがっていますか？

教育の成果を2年たらずの実績で語ることは難しいのですが、あえてあげるとすれば二つあると思います。一つは共通教育の理念・目的・目標がある程度まで呈示されたことにより、シラバス等、学習指導の方向性が以前よりも見えやすくなり、教員にとっては授業設計、学生にとっては履修計画が立てやすくなったことです。もう一つは、共通教育を全学出動体制で実施する方策を強く進めたことから、各専門学部の先生方が初年次教育の大切さを実感するようになったことです。

つまり現時点の成果というのは、真の教育改善に向けた第1段階が整備されたということです。私は共通教育の改革は3段ロケット方式が現実的と考えています。共通教育の質量は巨大ですから、離陸のためには、つまり第1弾ロケットは莫大なエネルギーを要します。3年目までは離陸の段階であり、その意味の成果は達成できたと思います。



現段階で、共通教育が抱える課題は何ですか？

これは実はいくつもあります。教育プランというのは、本来、理念面でも実施面でも十全に練り上げられたものであるべきです。しかし一方で教育はそのつどの与件に強く制約を受けますから、プランニングも理想通りにはいきません。ルネッサンスプランも2年間の実践により、基本的な方向性は正しかったとの感触が得られたと同時に、いくつもの矛盾や課題を抱えていることも見えてきました。

大きな問題としては、ルネッサンスプランでは共通教育の理念・目的の整理は一定程度なされたもの

の、まだ不徹底で、記述にあいまいな部分が少なくなく、このことが実施面の問題をもたらしていることです。

一番問題なのは、総じて、授業を担当する教員と受ける学生とが、共通教育の目的や必要性、意義についての統一的理解が共有できていないことです。もちろん先生方はそれぞれの担当科目について一定の目的に沿って授業設計をしているのですが、その際各自の解釈が優先しがちで、科目区分という括りで見ると、統一性に欠けることとなります。この結果として、同じ科目区分なのに授業内容・レベルがバラバラという問題が現に生じています。またそうした授業を受ける学生にとっては、共通教育を受けることの意義がつかみにくい、したがって勉強しようという気持ちが起こりにくい、という非常に由々しい問題が生じています。

問題はほかにもいくつもあります。実施運営面での課題も山積しています。いずれの問題も本学の全教職員が知恵を出し合い、また惜しみなく汗を流して組織的に取り組むことによる以外に解決の道はありません。

大学教育総合センターの教育改革推進委員会で、新しいプログラムが検討されていますが、その骨格を説明してください。

同委員会では「リンクカリキュラム」と呼んでいますが、基本的考え方としてはルネッサンスプランの課題をカリキュラムのレベルで可能な限り修正することがねらいです。

先ほど述べた反省を踏まえ、共通教育の目的を全ての人が共有できるよう、「自ら学び考える学生を育てる」という一点に焦点化します。これはルネッサンスプランの目的でもあったのですが、抽象的な言い方をせず、核心だけを目的として掲げるものです。

この目的を実現するため、大枠はルネッサンスプランに従いつつ、科目の立て方や授業内容等の見直しや変更を検討しています。

検討している主な点は次の6点です。

1. 主題別科目に必修科目（コア科目）を設置
2. 主題別科目に30人規模のクラス編成の科目群を2つ立てる

①ゼミナール科目

地球環境、自然、生命、人類の歴史・文化・思想等、普遍的テーマについて、調査法、思考法、プレゼンテーション能力等の習得をはかる

②プロジェクト学習

愛媛とその周辺地域のフィールド学習をベースとして、身近な現実からの課題発見作業を通じて、実践的思考力・行動力の素地を培う

3. 講義科目については、学びの体系性確保に留意し、その具体的方法を検討中
4. 英語教育・情報科学教育の一層の充実
5. 専攻別基礎科目の授業内容の見直し
6. 未習外国語・スポーツ科目については、本学の実状に沿ったあり方を検討中

共通教育企画・実施部長として、本年度の到達目標は何ですか？

本年度は法人化を控え、企画・実施部としても、とても課題が多い年です。3年目に入ったルネッサンスプランの問題点を実施面からどれだけリカヴァリーできるか、すくなくとも各授業区分毎に良い授業のスタンダードモデルを共有して、具体的な授業改善へのステップを現実のものとする、つまり冒頭に述べた3段階ロケットのうち、2段階目のロケットに点火できればと考えています。

（聞き手 佐藤浩章 大学教育総合センター）

まつひさ・かつとし

大学教育総合センター 教授 副センター長

1968年3月東北大学文学部美学哲学科卒業、1971年3月東北大学大学院文学研究科修士課程美学美術史学修了。1971年3月文学修士（東北大学）。専門分野 美学、芸術学、美術史学

▼ 大学改革に関する教職員の皆さんの意見を掲載します。こちらがインタビューに伺うこともありますが、投稿も受け付けております。随時連絡をお待ちしております。巻末の◎印の編集委員までお願いします。

E - Learning で授業改革を - 家本修氏 FD・SD講演会開催 -



「e-Learning の現状と課題」をテーマに愛媛大研究協力会の情報技術研究部会と大学教育総合センターの共催によるFDセミナーが3月20日(木)、学務部会議室において開催されました。大阪経済大学経営情報学部教授の家本修氏を講師に招き、教職員23人、一般2人の参加がありました。

e-Learning は、現在、企業内教育や語学教育に注目されているが、大学の教育改革にITを用いた次世代型教育を実施するために教育システム、教育評価の検討を必要とする、また、e-Learning は、教材をただデジタル化すればよいというものではなく、教育方法を開発しなければならない、そして、開発・利用のための目的は、教育の効率性(経済・時間・エネルギー・人的効果)をねらったものである、バーチャル・シミュレーションを自由に設定することで想像・創造的活用効果も期待できる、学習者の立場から見れば合理性のある高い内発的動機付けのある教育が期待できる等と述べられました。講演後、学生の満足感と教育保証等について自由討論も活発に行われ、大変有意義な勉強会になりました。

求められるのは教職員間での目標の共有 - 小林昌二氏 FD・SD講演会開催 -

3月26日(水)、学務部会議室にて、新潟大学人文学部教授、小林昌二氏を迎え、「カリキュラム改革と大学評価の課題－新潟大学の事例から－」と題し



たFD・SD講演会が開催されました。

飽食の時代に少子化が進行する中、物質的には何不自由なく育った子供達は、自分の将来像を描けないうまま、自ら何かを求めようとする意欲が育ちにくい環境にある。この傾向を初等・中等教育のいわゆる「ゆとり教育」が、本来のねらいとは裏腹に、助長する方向に作用している。このためいわゆる「自分探し」が長期化し、大学在学期間だけでなく、卒業後まで尾を引く時代になっている。一方で、高等教育は国際化時代にあつて、卒業時点では国際水準にまで学生の能力を高めることが急務とされるようになったと、高等教育の現状について明快に説明されました。

その上で、大学でのカリキュラムは高大連携から高度職業人育成にいたるまで、非常に多様で複雑なシステムとならざるをえない。その運営は細部にいたるまで肌理の細かい、しかも全体として統一のとれた円滑な運用が求められる。今までのように、教員は研究・教育、事務職員は運営業務という分担体制では、こうした切迫した必要に対応できない。大学の教員と職員は、目的・目標を共有し、全組織をあげて問題解決にあたる体制をつくる必要があると述べられました。

講演後、教育方法や教育効果等について自由討論も活発に行われ、大変有意義な勉強会になりました。最後に、活字離れも危惧されていますが、小林先生から「私の一冊」と題する大変興味深い読書授業の紹介がありました。これは、教員から推薦図書を募集し、学生が好きな時間に読書をする、随時、教員から内容のチェックを受け、単位を出すという授業の構想でした。

公開授業を成功させるコツは何か？

- 元木幸一氏 FD 講演会開催 -

3月31日(月)、学務部会議室にて、山形大学人文学部教授、元木 幸一氏を迎え、「山形大学版公開授業の試み」と題して、山形大学が平成11年度から試行している公開授業の取り組みについて、そのねらいや実状について具体的な紹介がなされました。

授業改善の具体的方策としては、学生による授業アンケートが一般的だが、もう一つ、授業を同僚に公開し、検討会を行うというやり方がある。これは、授業を公開する側にとって自分の授業の長所・短所を指摘してもらえるとというだけでなく、見学する側にとっても、ああこうすればいいんだ、という示唆を得られることから、特に具体的な改善策を引き出しやすいというメリットがある。

しかし実施にあたっては、具体的にどのような形で授業を公開するかが問題になった。当初は有志をつのり、授業を公開するのでいつでも見に来てほしい、という方式を試みたが、これには自主的参加者がほとんどなく、これは失敗であった。この反映に達、13年度から4人の教員が一組になって、互いの授業を公開する「ミニ公開授業・検討会」方式に切り替えた。これは気心の知れた者同士が相互に公開しあうということで、和気あいあいとした中、検討会(授業分析)も活発な意見交換があり、成果があったと評価している、と述べられました。

本学でも、個別のニーズに応じたFDが求められる中、非常に参考になる講演となりました。

シリーズ 授業のティップス(3)

「聴覚に障害を持った学生への対応は…」



Q. 受講生の中に、聴覚に障害を持った学生がいます。どのような点に注意すればよいのでしょうか？

「はっきりと、ゆっくりと話す」

1. 聴覚障害学生と補聴器

聴覚障害学生は補聴器を装着していますが、補聴器は音を大きくする役割しかありません。そのため、ラジオのボリュームを上げ過ぎると余計に聞き取りにくくなるように、音の有無は分かっても、必ずしもコトバがはっきりと聞こえるわけではないのです。また、個人用補聴器は1対1の会話では役立っても、授業場面では話者との距離が遠すぎて、効果が薄くなります。「補聴器をつければOK」ではない点を、まずご理解ください。

2. 聴覚障害学生に必要な情報

聴覚障害学生は、補聴器からの情報と視覚的な情

報(話者の口の動き・板書・OHP・配布資料など)をあわせて授業内容を理解しています。聴覚の障害が重くなるほど、視覚的な情報の比重は増します。このように、聴覚障害学生は情報の多くを視覚に頼っていますので、次の点にご配慮ください。

配慮していただきたいこと

学生の方を向いてはっきりと口を動かし、ややゆっくり目に話してください。

授業内容を分かりやすく示した資料を手渡していただくと大変役立ちます。授業用の講義録のコピーを授業の始めにお渡しいただいても結構です。授業中に作業等が入る場合は、作業課題の内容が理解できているかどうかを、本人に確認してください。

聴覚障害学生は、教官の話しを聞いているとき(口元を見ているとき)はノートがとれません。逆に、ノートを取ったり資料を見たりしているときは教官の口元を見ることができません。できるだけノートをとる時間的な余裕を与えてください。

避けていただきたいこと

板書しながら話す・口元が見えないので聴覚障害学生には全く理解できません。

部屋を暗くする・・・視覚情報が遮断されて何も分からなくなってしまう。

3. ノートテイク支援について

聴覚障害学生の受講に際しては、学生の両脇に 2 名のノートテイク・ボランティアを配置し、授業を少しでも多く理解できるように支援しています。ボランティア学生は交代で講義内容をノートに書き、聴覚障害学生はそれを見て教官の話す内容を理解します。しかし、文字を書くには時間がかかるため、授業内容の全てを書き取ることはできません。また、教官の話す速度が速すぎると、ノートテイクがついていけなくなってしまいます。

ノートテイク支援が行われているときは、ゆっくり目の速度で話すようにしてください。教官の話にノートテイクがついていけているかどうか、ときどき確認していただくと助かります。

授業の始めに、その日の講義の流れを示す講義概要や配布資料を、聴覚障害学生とノートテイクの両方に手渡して頂くと、大きな助けとなります。

4. FM補聴器の使用について

学生によっては、FM補聴器を使用する場合があります。FM補聴器は、話者がつけたピンマイクから無線で学生の補聴器に直接音声を伝えます。FM補聴器を使用するときは、学生からピンマイク装着の申し出がありますので、ご協力をよろしくお願いします。なお、FM補聴器は、話者の声が聞き取りやすいという長所を持つ一方、マイクをつけている人以外の人の声が聞こえないという欠点もあわせ持っています。

5. 聴覚障害学生がいちばん困る場面

(1) ビデオの視聴場面

聴覚障害学生がいちばん困るのがビデオの視聴です。ノートテイクや手話を見ているときは画面を見られませんが、画面を見ているときはノートや手話を見ることはできません。もっとも効果的な支援は、画面に字幕を挿入することですが、それには設備・時間・費用がかかります。そこで、現実的な支援方法として、授業で用いるビデオを 1 週間ほど前に聴覚障害学生に貸し出し、支援ボランティアと一緒に前もって視聴させることが考えられます。事前の貸し出しが困難な場合は、授業が終わったあとに貸し出して、内容を理解できるようにしてください。

(2) ディスカッションの場面

ディスカッションでは、会話が連続する上に、話者の位置や話者との距離が様々なため、内容の聞き取り・読み取りが極めて困難です。ディスカッションの進行にあわせたノートテイクは難しく、たとえできたとしても、聴覚障害学生の理解はリアルタイムの会話から常に遅れることとなります。この問題を解消するためには、十分な通訳能力を持つ手話通訳者の配置が必要ですが、手話通訳者の確保が難しいことと予算面の問題から、配置が困難な現状です。そこで、最低限の援助として、ディスカッション場面では、以下の配慮をお願いします。

①発言者に、聴覚障害学生の方を向いて、ゆっくり目に話すように指示する。

②複数の人が同時に発言しない。発言と発言の間には少し間を置いてもらうようにする。

③学生の発言が筋道立っていないときは、教官が内容を整理・要約して確認する。

(3) 外国語の授業

ノートテイクや手話通訳による対応が困難ですので、できるだけ板書してください。また、聴覚障害学生は **Listening** ができませんし、**Oral Expression** も難しいことが多いので、試験等では代替課題で対応していただくようにお願いします。

(4) 音楽・音

通訳のしようがなく、対応が不可能です。聴覚障害の程度によっては、特殊な方法を用いることで、聞こえるようになる場合もありますので、必要な場合は障害者学習支援委員会にご相談ください。

6. 体育実技について

体育実技は、ルールが明確な上に、周囲の人を見ながら行動できますので、聴覚障害学生にとって比較的わかりやすい授業です。ただ、進行・手順が複雑な場合や途中で指示が必要な場合は、その内容を近距離で、1対1で伝えていただくようにお願いします。

7. 手話通訳について

現在のところ、聴覚障害学生の授業支援はノートテイク・ボランティアの配置にとどまっていますが、障害者学習支援委員会では、将来、必要に応じて手話通訳をつけることも計画しています。手話通訳は、外国語の通訳と同じで、十分な通訳ができるためには、長年の研修と努力が必要です。そのため、手話

2月

- 4日 (FD) FD講演会「大学教員に求められる職業能力とその職業能力開発プログラム」
 5日 (会議) 第3回センター自己点検・評価委員会
 6日 (会議) 第4回障害者学習支援委員会
 12日 (会議) 第20回センター教育改革推進委員会
 14日 (会議) 第14回共通教育企画・実施部企画委員会
 18日 聴覚障害学生とボランティア学生との意見交換会 (障害者学習支援委員会)
 21日 (会議) 第1回組織・規則小委員会
 26日 (会議) 第18回大学教育総合センター運営委員会

3月

- 5日 (会議) 第21回センター教育改革推進委員会
 11日 (会議) 第19回大学教育総合センター運営委員会
 19日 (会議) 第1回インターンシップ委員会
 19日 (会議) 第15回共通教育企画・実施部企画委員会
 20日 (FD) FDセミナー「e-Learningの現状と課題」
 24日 卒業式・学位記授与式
 25日 共通教育と専門教育との連携に関する意見交換会
 26日 (FD) FD/SDセミナー「カリキュラム改革と教育評価の課題」
 26日 教職員海外派遣・アメリカ班研修報告会
 26日 (会議) 第20回大学教育総合センター運営委員会
 27日 (FD) FD/SDセミナー「愛媛大学のブランド化」
 31日 (FD) FD勉強会「山形大学版公開授業の試み」

シリーズ 授業に役立つ工具箱(2)

教養とは何か？

阿部謹也『大学論』

(日本エディタースクール出版部 1999年 1800円)



今回紹介する本書は、元一橋大学学長の阿部謹也氏が書いた大学に関するエッセイ集です。大学における教養とは何かについては、永遠の論争のテーマではありますが、これまで日本の大学が前提としてきたリベラルアーツ型教養が、キャンパス・社会の変化に対応できずに、徐々に変わりつつあるのが現状です。つまり、リベラルアーツ型教養を支えていたのは、低い進学率、少ない大学数、キャンパスの都市からの隔絶、寮生活での密度の濃い人間関係、社会における大学のステータスの高さ・知の集積度の高さ、とい

った諸条件ですが、大衆化した日本の大学ではこうした条件を満たすのは困難となりつつあります。「自然・人文・社会」の三領域のタイトルを平易なものに変えたり、環境・生命などの新しい領域を付加したりすることで提供科目を増加・現代化したとしても、知識の総合という目的は完遂されないでしょう。現代版 Great Book (偉大なる古典) のリストを作り、学生たちに読書を課すのも非現実的です。教養観そのものの転換が求められているように思えます。

こうした中で、新たな教養論を提唱しているのが、阿部氏です。彼は教養を「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状態」とします。この定義は中世ヨーロッパ史の研究知見から生み出されたものであると同時に、かつての勤務校である一橋大での授業実践に裏づけされたものです。

本書は、かつての『「教養」とは何か』をベースに、わかりやすく阿部氏の教養論、大学論を知ることができます。

▼ 大学教員が授業をする上で役立つ書籍、WEB情報を紹介します。取り上げて欲しいテーマがある方は、巻末の編集委員までご連絡下さい。

学生の声

「履修方法の改善を」

1回生でとる授業をとれなかったとき、2回生でもとれるように学部と相談してほしい。(2回生)

(2003年2月21日受理)

センターから学生へのコメント

主題別科目であれば、基本的に2回生以降も履修可能です。ただ実際には、時間割の都合で専門科目とぶつかる可能性もあり、調整が難しい場合があります。該当する科目名が不明ですので、詳細を知らせていただければ個別に検討いたします。共通教育本館、共通教育係までお越し下さい。

(共通教育企画・実施部長 松久勝利)

「専門知識を生かす授業を望む」

学生という立場で大卒の変化を提案できる資格などないと思っています。ただし私が学生としての立場で考えられることについて述べます。「専門知識を生かす知恵を身につける」という部分が愛媛大学に欠けていることが「社会勉強」と銘打つバイトや課外活動に自らの成長を求めて生活の重点を置く学生が多くなっている一因となっているのではないのでしょうか。(一部内容割愛)

センターから学生へのコメント

あなたは「学生という自分の立場で大卒の変化を提案できる資格などない」と書かれていますが、そうでしょうか？ 大学を構成しているのは、教職員と学生です。是非、あるべき姿を考え、発言し続けてください。

あなたが指摘する「専門知識を生かす」授業という意味が、「大学で学習した知識や技術が、実社会でどのように生かされているのかをあわせて教える授業が望ましい」ということだとするならば、その考えに賛同します。認知心理学の最近の研究から明らかになっているのですが、知識の内容を、社会的文脈(どのように生かされているのか)を合わせて教授することが、学習者の知識の定着や学習意欲を増加させることが明らかになっています。

共通教育企画・実施部長に内容を伝えます。

(教育システム開発部 佐藤浩章)

センター掲示板

本学のFD・SDメーリングリスト スタート!

大学教育総合センターシステム開発部では、FD、SDに関する情報交換の場としてのメーリングリストをスタートさせます。講演会の開催情報、授業の悩み・アドヴァイスなどを交換できる場としたいと考えています。登録希望者は、下記アドレスへ、「FD・SDメーリングリスト登録希望」と書いて、メールを送信して下さい。sato@iec.ehime-u.ac.jp 是非、参加をお待ちしております。

メディア教育開発センター主催のFD講座

文部科学省大学共同利用機関であるメディア教育開発センターより、平成15年度の研修講座概要が届いております。参加希望者は、WEB、E-mail等でお申し込み下さい。詳細は下記でご確認下さい。システム開発部にも資料がございます。

<http://www.nime.ac.jp/KENSYU/index.html>

講座例：WEBデザイン/e-learningにおけるドロップアウト軽減策/メディア・リタラシーの授業/教育コミュニケーション力の基礎/オンラインコースの手法と戦略/高等教育に学ぶ障害者への配慮と学習支援/高等教育におけるe-learningのコーチング・ワークショップ/

■■■■IECレポートNo.6■■■■

愛媛大学大学教育総合センター広報誌

発行日：2003年4月1日

発行元：愛媛大学大学教育総合センター

〒790-8577 松山市文京町3番

TEL 089-927-8904 (代表) FAX 089-927-8915

<http://www.iec.ehime-u.ac.jp/iecweb/index.html>

編集者：愛媛大学大学教育総合センター広報小委員会

◎佐藤浩章(大学教育総合センター)・中村慶子(医学部)

折本素・松久勝利(大学教育総合センター)

内容に関する意見・要望・お問い合わせは、◎印の委員までお願いします。sato@iec.ehime-u.ac.jp 内線 8346